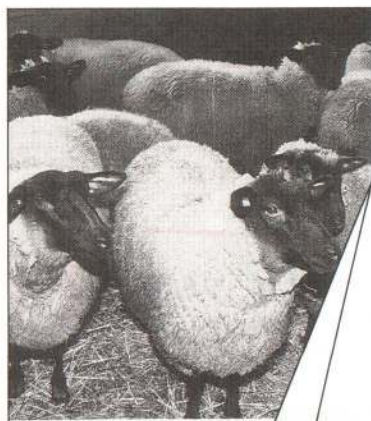




日本ではほとんどがこのサフォーク種です。

古臭い感じがしないでもありませんね。では、なぜ日本には羊にまつわる物語や諺が少ないのでしょうか。西暦五九九年、推古天皇の時代に、百済から二頭の羊が贈られたと日本書紀

平成3年は未年です。羊には「おとなしい」「柔順」「群れになる」などのイメージがありますが、何よりも私たちが実感できるのは、ウールのセーターや皮製品の肌ざわりと温かさ。ジンギスカン料理という人もいるかもしれませんね。

羊について考えながら、未年生まれの人たちにインタビューしてみました。

今年 は ひ つ じ 年

やさしい気持ちでいられよう...

羊は紀元前六千年ごろ、家畜化されたといわれています。馬は紀元前三千〜四千年ごろです。羊と人間の付き合いはとも長いことになります。ところが日本には羊にまつわる物語や諺があまり多くありません。すぐに思いつくところでは「羊の皮をかぶった狼」「羊頭狗肉」くらいのもんです。「箱根の山は天下の険」と歌われる箱根八里という唱歌の中に「羊腸の小径」がでてきます。これは曲りくねった山道を表したものです。羊の腸の長さは、体長の二十〜三十倍と、反すう動物の中でも特に長いので、この表現はピッタリです。ただ、ちょっと

に記されています。しかし、羊は乾燥した風土が好きなので、日本の気候に合わなかったでしょう。あまり繁殖しなかったようです。そのため、欧米のように物語や諺が多くないのだらうといわれています。

明治の初期、政府は綿羊の飼育振興を試みましたが失敗。その後、軍服などの製造のために羊の飼育が奨励されました。また、戦後は農家の副業として、多いときは百万頭近くも飼育されてきました。しかし、現在の飼育頭数は、北海道や東北を中心に三万七千頭ぐらいにすぎません。大館ではわずかに三十五頭です。品種も、白い毛がふかふかしたコリデル種から、頭と四肢が黒く精悍な姿をしたサフォーク種へと移り変わり、現在、国内の羊のほとんどがこのサフォーク種です。

羊毛は、天然繊維の人気上昇で需要が増えていますが、外国産が中心で、日本ではオーストラリアやニュージーランドなどから輸入しています。ケンブリッジ大学の研究によると、未熟児の赤ちゃんを小羊からとったラムウールに寝せて育てると、成長が早いそうです。ウールのやさしい肌ざわりが、母親に抱かれていたのと同様に皮膚を心地よく刺激し、成長を促すためと考えられています。

さて、「一年の計は元旦にあり」といいます。今年の目標を決めて「迷える羊」にならないよう、スタートを切りましょう。そして、すべての人々が羊のやさしさに包まれますように...



羊のといえはこんな風景ですよね

